

講演記録

子どもに愛は伝わっていますか

——豊かな時代の親子関係を考える（後編）——

春日 耕 夫

（受付 2006年5月10日）

それでは、後半の話を始めたいと思います。

いったいどうすれば子どもに愛は伝えられるのか、子どもに愛を伝えるためにはどうすることが必要なのか、そういった問題について私たちはあらためて考えてみなければならなくなってしまっているのではないか。そういうふうに先ほどまでの話では言ってきたわけなんですけど、それでは、なぜ私たちはそういった問題についてあらためて考えてみなければならなくなってしまったのか。その理由は何なのか。言うまでもなく、私たちが生きているこの時代が豊かな時代だからなんですよ。豊かな時代になればなるほど愛を伝えることが難しくなってしまうからなんですよ。

それでは、なぜ豊かな時代になればなるほど愛を伝えることが難しくなってしまうのか。その理由は何なのか。いろんな問題が複雑に絡まり合っていると考えるべきなんでしょうけど、そういった問題のひとつとして、というより、むしろ、決定的な問題のひとつとして、絶対的な強制力と言いましょうか、有無を言わさぬ強制力と言いましょうか、あるいは、逆らいたい宿命とでも言いましょうか、そういった類の強制力が豊かさゆえに解体してしまったという問題があると言っただけではないか。そういうふうに先ほどまでの話では話してきたわけなんです。

しかし、問題はそれで終わりというわけではないんです。まだまだ問題は続くんです。いままで話してきましたことと微妙に重なる問題なんですけど、豊かな時代の親子関係は、豊かな時代の親子関係だからこそ、^{ネガティブ}否定的な感情のコミュニケーションによって覆い尽くされてしまうことになりか

ねないという、そういう問題がさらにあると私は思うんです。どういうことかと言いますと、こういうことなんですね。

すでに先ほども言いましたように、豊かな時代というのは、何よりもまず、よりよき明日のために今日一日を生きるといった生き方が可能になった時代なんですね。そういった時代のなか、親は子どもの幸せを願うようになって参ります。とりわけ、子どもの将来の幸せを願うようになって参ります。そして、「子ども中心」の家族や親子関係を作るようになり、「子育て中心」で「教育中心」の家族や親子関係を作るようになって参ります。当然、子どものために精一杯のことをしてやりたいと思うようになって参ります。もちろん、単にそう思うだけではなく、実際にも精一杯のことをしてやるようになって参ります。

たとえば、10年ちょっと前のことなんですが、ある損害保険会社が「子どもひとりを育てるためにいったいどれくらいのお金を親は使っているのか」という調査をやっているんですね。その場合、どの子も4年制大学に進学するものと仮定して、「子どもが生まれてから4年制大学を卒業させるまでの間にいったいどれくらいのお金を親は使っているのか」という形でその調査をやっているんですね。

あらためて言うまでもないことなんですが、子どもひとりを育てようとしますと、いろんなところでいろんなお金が必要になってきます。教育費が必要になってくるのは当然のこととして、住居費だって余分に必要になってきます。食費や衣服費だって余分に必要になってきますし、水道光熱費や娯楽費だって当然余分に必要になってきます。医療費も馬鹿にならないくらい増えてきますし、交通費やその他諸々の経費も増えてきます。というわけで、子どもひとりを育てようとしますと、いろんなところでいろんなお金が余分に必要になってくるわけなんですが、そういった諸々のお金を合計するといったいどれくらいの金額になってしまうのか、子どもが生まれてから4年制大学を卒業させるまでの間にいったいどれくらいのお金を親は支出しなければならないのか、そういった点についてある損害

春日：子どもに愛は伝わっていますか

保険会社が調査をしたというわけですね。そうしましたところ、平均で、なんと三千万円前後という結果が出たというんですよね。その場合、子どもを国公立の学校に通わせるのか、私立の学校に通わせるのかということで大変な違いが出てくるわけなんですけど、仮に幼稚園から大学まですべて私立の学校に通わせたとした場合はおよそ3千600万円、すべて国公立の学校に通わせた場合でもおよそ2千800万円という、そういう結果が出たというんですよね。

皆さん。すごい金額でしょう。信じられないくらいの金額でしょう。そう言っている私自身、にわかには信じがたい気分なんですけど、しかし、この調査結果は日本ではもっとも信頼するに値すると一般に言われている新聞に掲載された調査結果なんですよね。そういったところから言いかけても、この調査結果はおそらくそのまま信用していいんだらうと思うんですが、そうしますと、親は大変なお金を子どものために注ぎ込んでいろいろしてやっているということになってくるわけですね。そうしますと、いったいどういうことになってくるかということなんですけど、それほど大変なことを親は子どものためにしてやっているわけですから、親の胸のうちにはいつも、「こんなにしてやってるのに！」といった思いがくすぶっていることになりかねないという、そういうことになってしまうんですね。

で、そういう状況のなかで子どもが「何々を買ってくれ」と言ってくるわけですね。そうしますと、親は本当にいろんなことを子どものためにしてやっているわけですから、子どもがそうやってきた瞬間に、「えっ、またなの?!」って、そう思うことになりかねないんですね。もちろん、皆が皆そう思うわけではないでしょうけど、少なくともそう思うってしまう可能性は大いにある。

それに対して、貧しかったかつての時代の親たちは、子どもにいろいろしてやりたいと思っても、してやることはできなかった。一家が食って生き延びていって、何とかしてサバイバルしていくということそれ自体を最優先課題としなければならない時代でしたから、子どものことなんか二の

次三の次。何とかして一家が食って生きていくために必死になって働くという、そういった意味では「生存追求最優先」で「労働中心」と、先ほどから言ってきたわけなんです、そういった家族や親子関係を作っていかなざるをえなかった。当然、「子ども中心」で「子育て中心」の家族や親子関係なんて、想像さえできない世界だった。

もちろん、だからと言って、かつての時代の親たちが子どもを大事に思っていなかった、なんてわけではないんです。あらためて言うまでもないことなんです、かつての時代の親たちだって、子どもを大事に思っていた。というより、むしろ、ある意味では、豊かな時代の親たち以上に、子どもを大事に思っていた。「子宝」という言葉までありましたように、お金もなければ財産もない、一家が食って生き延びていって何とかしてサバイバルしていくということだけで精一杯という、そういう時代でしたからこそ、親にとっては子どもだけが唯一の「宝」だったんだという、それが「子宝」という言葉がもともと持っていた本来の意味だったんだと私は勝手に思っているわけなんです、それはともかくとしまして、かつての時代の親たちだって、子どもを大事に思っていた。しかし、現実の生活においてはどうだったかと言いますと、一家が食って生き延びていって何とかしてサバイバルしていくということそれ自体を最優先課題とせざるをえなかったわけですから、子どもにいろいろしてやりたいと思っても、してやることはできなかった。たまにはおいしいものでも食べさせてやりたいと思っても、食べさせてやることはできなかった。冬の寒い季節になって、暖かい肌着など買ってやりたいと思っても、買ってやることはできなかった。それどころか、単にお腹いっぱい食べさせてやるという、それさえできない場合だって、珍しいことではなかったんです。ですから、当時の親たちの胸のうちには、いつも、「してやれなくてすまないね」とか、「してやれなくてかわいそう」といった思いがあったはずと私は思うんです。「たまには何々してやりたい」とか「何々してやったら喜ぶだろうに」といった思いがまずあって、しかし、現実にはそうしてやれないわけですか

春日：子どもに愛は伝わっていますか

ら、「してやれなくてすまないね」とか、「してやれなくてかわいそう」と、胸のうちのどこかでは、多かれ少なかれ思ってしまう。それが貧しかった時代の親たちのごく一般的な気持ちだったと思うんです。

ですから、たまたま何かおいしいものでも手に入ったとしますよね。たとえば、またまた私が子どもだったころの話で恐縮なんですけど、私が子どもだったころ、田植えというと、大変な仕事だったんですよ。最近では田植機械を使ってバーツといっぺんにやってしまいますから、それほどありませんけど、当時は全部手作業でやっていたわけですからね。水を張った泥田に中腰になってかがんで、小さな苗をひと株ひと株、手作業で植えていくというやり方でやっていたわけですからね。ですから、当時の田植えというと、本当に大変な仕事だったんです。しかも、非常に手間のかかる仕事でしたから、自分の家の家族だけでやろうとすると、一週間も10日もかかってしまうんですね。ですから、当時は隣近所の農家どうしが協力しあって、お互いに手伝ったり手伝ってもらったりしながらやっていくという形でやっていたんですよ。たとえば、10軒ぐらいの農家がひとまとまりになって、今日は誰某さん家だれそれの田植え、次は誰某さん家だれそれの田植えといった形ですね。そういった形で、一軒一軒の田植えをみんなが一斉に手伝いながら順番にやっていくという形でやっていたんですよ。

で、10時とか昼過ぎの3時とかになるとお茶の時間になるんです。その場合、お茶菓子なんて気のきいたものは普通はなくて、たいていはたくあんたくあんのシッポでもかじりながらお茶を飲むというのが普通のときのお茶の時間だったんですけど、田植えのときだけは例外で、そのときだけは特別にお茶菓子らしいお茶菓子を用意するんですね。なにしろ、隣近所の人たちが一斉に手伝いに来てくれるわけですから、見栄もありましょうし、義理もありましょうし、それより何より、手伝いに来てくれたことに対する感謝の気持ちというものもありましょうし、というわけで、普通なら絶対に買わないようなお饅頭なんかを買ってきて、お茶菓子として振る舞うんですね。その代わり、自分がよそのおうちの手伝いに行ったときは、そのお

うちの人が大奮発して、減多に食べられないようなお饅頭なんかを振る舞ってくれるんです。

ところが、そのお饅頭を母親たちは食べないんです。そのお饅頭は食べないで、たくあんのシippoでもかじりながらお茶をすませてしまうんです。どうしてなのか、分かりますか。子どもたちに食べさせてやりたいと思ったから、なんですよ。だって、おいしいおいしいお饅頭なんですからね。たまには子どもたちに食べさせてやりたいと思っても、食べさせてやれないお饅頭なんですからね。そのお饅頭がいま目の前にあるわけなんですからね。当然、母親たちは、そのお饅頭を、子どもたちに食べさせてやりたいと思うんです。ですから、そのお饅頭を自分では食べないで、自分はたくあんのシippoでもかじりながらお茶だけ飲んで、お饅頭は大事に大事にふところなんかにしまい込んで、家に持って帰るんですね。で、家に着いたら子どもたちを呼び集めるんです。「おーい。みんな、おいでー」って。「おいしいおいしいお饅頭だよー」って。で、そのお饅頭を包丁で6等分に分けるんです。どうして「6等分」なのか、分かりますか。子どもが5人で、母親と合わせて6人だから？ それとも、子どもだけで6人だから？ 正解は「子どもだけで6人だから」なんですよ。要するに、母親自身は食べないんです。母親自身は食べないで、子どもたちだけに食べさせるんです。

で、そのお饅頭を子どもたちは「おいしいねー」と言いながら食べるわけなんです。そうやって子どもたちが食べるそのお饅頭は、ただのお饅頭ではないんです。そのお饅頭には「子どもたちに食べさせてやりたい」という思いでわざわざ家まで持ち帰ってきた親の思いがこもっているわけですね。おいしいおいしいお饅頭だからこそ自分では食べないで、子どもたちに食べさせてやりたいという親の思い。子どもたちに食べさせて、子どもたちを喜ばせてやりたいという親の思い。そういった親の思いを仮に「愛」と呼ぶことにするとしますと、そのお饅頭には親の愛がこもっているわけですね。

春日：子どもに愛は伝わっていますか

そうしますと、いったいどういうことになってくるかということなんです。そのお饅頭を食べるということは、言うならば、親の愛のこもったお饅頭を食べるということにほかならないわけですから、そのお饅頭を食べるとき、子どもたちは、そのお饅頭とともに、親の愛も一緒に食べるという結果になっているんですね。ですから、そのとき、子どもたちは、少々オーバーに言えば、二重の喜びに満たされる結果になっていると私は思うんです。まさしくそういった意味で、私は、「二重化された喜び」とか「喜びの二重化」と言っているわけなんです。どういうことかと言いますと、まず第一に、おいしいおいしいお饅頭が食べられる喜びというものがありますよね。食べたい食べたいと思っても滅多なことでは食べられない、おいしいおいしいお饅頭が食べられる喜び。そういった類の喜びがまず第一にありますよね。しかし、それだけではないんです。それに加えて、さらにもうひとつ、そのお饅頭を自分では食べないで、「子どもたちのために」とわざわざ家まで持ち帰ってきた親の気持ちの嬉しさというものがあると私は思うんです。おいしいおいしいお饅頭だからこそ自分では食べないで、子どもたちに食べさせてやりたいという親の思い。子どもたちに食べさせて子どもたちを喜ばせてやりたいという親の思い。そういった親の思いを仮に「愛」と呼ぶことにしようと、ほんの先ほど言ったわけなんです。そうしますと、この第二番目の嬉しさは、言うならば、「親の愛を感じる嬉しさ」と言っていていいでしょうね。あるいは、少々思い切って、いささか「気障な」言葉で言うとしみますと、「親の愛に満たされる嬉しさ」と言ってもいいでしょうね。あるいは、もう少し思い切って、目一杯「気障な」言葉で言うとしみますと、「親の愛に包まれる嬉しさ」と言ってもいいでしょうね。いずれにせよ、そういった類の嬉しさが、そのお饅頭を食べる嬉しさそのものに加えて、さらにあると私は思うんです。そういった意味で、私は、先ほど言いましたように、「二重化された喜び」とか「喜びの二重化」と言っているわけなんです。そうしますと、まさしくそういった意味での「二重化された喜び」を子どもたちは母親が持ち帰ってきたそのお饅頭

を食べるとき感じとることになると言ってもよいのではないか。そして、まさしくそういった意味での「二重化された喜び」を親子が容易に伝え合っていくことができた時代、それこそが貧しかったかつての時代だったと言ってもよいのではないか。

もちろん、だからと言って、「昔はよかった！」なんて言いたいわけではないんです。先ほどからずっと言ってきましたように、貧しかったかつての時代は、貧しい時代だったからこそ、大変な悲惨や悲しみに満ち満ちた時代だったんです。にもかかわらず、そういった現実を見ようともしないで、「昔」を単純に美化してしまって、「昔はよかった！」なんて言うとするれば、それは見当違いもなはだしいし、許しがたいことだと私は思うんです。しかしながら、それと同時に、貧しかったかつての時代は、貧しい時代だったからこそ、子どもに十分なことはしてやれなかった。「してやりたい」と思っても、してやることはできなかった。だからこそ、かつての時代の親たちは、「してやれなくてすまないね」とか、「してやれなくてかわいそう」と、胸のうちのどこかでは、たいていの親が、多かれ少なかれ思っていた。だからこそ、何かたまたましてやれる機会がきた場合は、「いやいやながら」してやるのでは決してなく、「しょうがない子ね！」って調子でしてやるのでもなく、「してやろう！」とか「してやりたい！」という気持ちでしてやることができた。「おーい、みんな、きてごらん。おいしいおいしいお饅頭だよー」って感じで、言うならば、愛と優しさに満ち満ちた気持ちでしてやることができた。だからこそ、それを受け取る側の子どもたちも、そのお饅頭を食べるとき、単にお饅頭を食べる嬉しさだけではなく、親の愛にも満たされて「二重に嬉しい」気持ちになっていくという、そういう関係を容易に親と取り結ぶことができた。そういった意味では、言うならば、ものを与えることがそのまま愛を伝えることでもありえた時代、したがって、ものを与えることによって愛を伝えることが容易にできた時代、あるいは、同じことを子どもの側から言うとしみますと、ものを与えられる度毎に親の愛を感じる嬉しさにも同時に満たされることが

春日：子どもに愛は伝わっていますか

できた時代、したがって、「二重化された」喜びが親から子へと容易に「伝え-伝えられ」た時代、それこそが貧しかったかつての時代だったんだと、あるいは、少なくとも貧しかったかつての時代の一面ではあったんだと、そう言っていていいと私は思うんです。

ところが、そういった親子関係のあり方は、社会全体が豊かになっていくにつれて、どんどんなくなっていってしまうんです。そして、まったく違ったタイプの親子関係が新しく現れてくるということになってしまいます。どんな親子関係かと言いますと、ものが「与え-与えられる」度毎に、愛ではなく、怒りや憎しみなど否定的な感情ばかりがどんどん「伝え-伝えられ」ていくという、そういう親子関係ですね。

ほんとに、先ほどから何度も言ってきましたように、豊かな時代は、何よりもまず、よりよき明日のために今日一日を生きるといった生き方が可能になった時代なんですよ。そういう時代のなか、親は子どもの幸せを願い、「子ども中心」で「子育て中心」の家族や親子関係を作るようになって参ります。当然、子どものために精一杯のことをしてやりたいと思うようになって参ります。そして、その結果、三千万円前後もの大金を親は子どもひとり育て上げるために注ぎ込む羽目になってしまっているという、そういう調査結果を先ほどは紹介したわけなんですけど、そうしますと、いったいどういうことになってくるかと言いますと、それほど大変なことを親は子どものためにしてやっているわけですから、親の胸のうちにはいつも、「こんなにしてやってるのに！」といった思いがくすぶっていることになりかねないという、そういうことになってしまうんです。

で、そういう状況のなかで子どもが「何々を買ってくれ」と言ってくるわけですね。そうしますと、親の胸のうちにはいつも「こんなにしてやってるのに！」といった思いがくすぶっているというわけですから、子どもがそうやってきた瞬間に、「えっ、またなの?!」って、そう思うってしまうことになりかねないんです。ですから、当然、親の口からは、「そんなのはダメ！」って方向の言葉ばかりが出てしまうという、そういうことに

もなりかねない。「ほんとに、もう、何でもかんでも欲しがらんじゃないの！」とか、「この間も何々を買ってやったばかりでしょ！」とか、「どうしてあんたはそうやっていつもいつも欲しがってばかりなのよ！」とか。そうしますと、当然、子どもとしては、言いたくなってしまうんですね。「だって欲しいんだもん！」って。「どうしてもそれがあるんだもん！」って。「○○ちゃんだって持ってるんだもん！」って。そうしますと、当然、親としては、言いたくなってしまうんですね。「ほんとにそれがあるんかね?!」って。「うちにはお金はないんじゃないかね！」って。「欲しい欲しいと言ったって、いつもいつもってわけにはいかんのじゃけんね！」って。で、そうやって、結局、「そんなのはダメだ！」と言う親と「買ってくれー」「買ってくれー」と言い募っていく子どもとが力づくの綱引き合戦を繰り返して行って、怒りや憎しみなど否定的な感情をかき立て合っていて、そうした感情をお互いにぶつけ合っていくという、そういう結果になってしまうんですね。そして、その挙げ句、結局は親のほうが根負けして、子どもが欲しがるとまに買い与えていくという、そういう結果になってしまうんですね。

その場合、親は、必ずと言っていいくらい、「余計なひとこと」をつけ加えるんです。「ほんとに、もう、この子は言いだしたらきかんのじゃけ！」とか、「これが最後じゃけんね！」とか、「今度は大事にしんさいよ！」とか、「お父さんに有難うぐらい言いんさいよ！」とか。で、そうやって親はありとあらゆる悪口雑言、怒りと憎しみの言葉のオンパレード、ありったけの否定的な言葉を吐き散らしつつ、「持ってけ、この野郎！」って感じでグラブを買ってやるわけなんです。そうやって子どもが買ってもらうそのグラブは、親の怒りや憎しみなど、ありとあらゆる否定的な感情がまみれにまみれてまみれ込んだ、そういうグラブなんです。ですから、子どもは、そのグラブを手に入れるとき、そのグラブとともに、親の怒りや憎しみなど、ありとあらゆる否定的な感情も目一杯もらってしまうことになるんですね。で、そういうやりとりがものやりとりが行われる度

春日：子どもに愛は伝わっていますか

毎に繰り返されていって、その度毎に親子が否定的な感情をかき立て合っていて、そうした感情をお互いにぶつけ合っていくという、そういう結果になってしまうんですね。

ほんとに、「何という不幸なこと！」と私は思うんです。親が子どもの幸せを願い、「子ども中心」で「子育て中心」の家族や親子関係を作ろうとする時代。だからこそ、親が子どものために精一杯のことをしてやりたいと思う時代。そして、実際にも精一杯のことをしてやっている時代。そういう時代だからこそ、親子が互いに否定的な感情をかき立て合っていて、愛と喜びの関係ではなく、怒りや憎しみなど否定的な感情ばかりを伝え合う関係を作ってしまうなんて、「何という不幸なこと！」と私は思うんです。しかしながら、それこそが、豊かな時代の親子関係のもうひとつの側面なんですよ。

*

というわけで、豊かな時代というのは、皮肉にも、親が子どもの幸せを願う時代だからこそ、親子が愛や喜びを伝え合っていく関係ではなく、怒りや憎しみなど否定的な感情ばかりをお互いに伝え合う関係になってしまいかねないという、そういう時代なんですよ。としますと、当然、私たちは、いったいどうすれば子どもに愛は伝えられるのか、子どもに愛を伝えるためにはどうすることが必要なのか、そういった問題についてあらためて考えてみなければならないということになってくる。そう私は思うんですね。

ところが、豊かな時代は、もう一方では、そういった問題の立て方そのものを著しく困難にしてしまう時代でもあるんですね。なぜかと言うと、その理由は、豊かな時代が、ほかならぬ、「子ども中心」で「子育て中心」の時代だからなんですよ。そういった時代のなか、親は子どもに精一杯のことをしてやるようになって参ります。そして、その結果、子どもひと

りにつき三千万円前後もの大金を注ぎ込む羽目になってしまっているという、そういう調査結果を先ほどは紹介したわけなんです、そうしますと、当然、たいていの親が、ふと不安になってしまうんですね。「こんなにしてやっていいんだろうか」「こんなにしてやったら我慢できない子になってしまうんじゃないだろうか」「欲しがってばかりの子どもになってしまうんじゃないだろうか」と。しかも、豊かな時代は「教育中心」の時代でもありますから、たいていの親が、自分の子を、欲しがってばかりの子どもではない、我慢すべきときには我慢できる、自制心をもった、そういう子に育てたいと思うんですね。ですから、当然、親たちは、「もっと我慢させなきゃいけないんじゃないか」「もっと厳しくしなきゃいけないんじゃないか」「あんまり甘やかしちゃいけないんじゃないか」などと考えるようになってしまいます。

しかも、そこに心理学者や社会学者や教育学者など、子育て問題の専門家たちがやってきて、恐怖の言葉をささやくんです。「それじゃあ、お母さん、甘やかしになっちゃいますよ!」「そんなに甘やかしてばかりだと我慢できない子になっちゃいますよ!」「欲しがり屋さんになっちゃいますよ!」「それでもいいんですか、お母さん!」って。そうしますと、当然、たいていの親が、「やっぱりもっと我慢させなくっちゃ!」「やっぱりもっと厳しくしなくっちゃ!」「あんまり甘やかさないようにしなくっちゃ!」と、ますます考えるようになってしまいます。

で、そこに子どもがやってきて、「何々を買ってくれ」って言うんです。そうしますと、当然、親としては、「やっぱりもっと我慢させなくっちゃ!」「あんまり甘やかさないようにしなくっちゃ!」と決心したばかりなんです、から、「そんなのはダメ!」って言いたくってしまうんです。そうしますと、当然、子どもとしては、「どうしてダメなんだよー」って言いたくなる。で、そうやって、結局、「そんなのはダメだ!」と言う親と「買ってくれー」「買ってくれー」と言い募っていく子どもとが力づくの綱引き合戦を繰り返して、怒りや憎しみなど否定的な感情をかき立て

春日：子どもに愛は伝わっていますか

合って行って、愛と喜びの関係ではなく、怒りと憎しみの関係を築き上げていってしまうという、例の親子関係のパターンにそっくりそのままはまり込んでいってしまうんです。

ですから、問題の立て方そのものを根本的に変えなければいけないと思います。「あんまり甘やかしちゃいけないんじゃないか」「もっと厳しくしなきゃいけないんじゃないか」「もっと我慢できる子に育てなきゃいけないんじゃないか」などといった発想そのものを変えなければいけないと私は思うんです。そういった発想というのは、要するに、「これこれこのように育てなきゃダメだ!」とか「これこれこのようにしつけなきゃダメだ!」といった観点からの発想だという意味で「しつけ先行型」の発想とか「教育最優先型」の発想と私は呼んでいるわけなんです。そういった発想そのものを変えなければいけないと私は思うんです。そして、どうすれば子どもに愛は伝えられるのか、どうすれば豊かな親子関係を作っていけるのか、子どもとの関係そのものを豊かに作っていくためにはどうすることが必要なのか、といった観点から子育てを考えていくという発想に切り替えていかなければいけないと私は思うんです。

で、そういった発想というのは、要するに、子どもとの関係そのものを豊かに作っていくことそれ自体を何より大事にしたいという観点からの発想だという意味で「関係豊富化的観点最優先型」の発想と私は呼んでいるわけなんです。そういった発想をする人は、残念ながら、非常に少ないんですよ。むしろ、「教育最優先型」の発想しかしようとしない人のほうが圧倒的に多いんですよ。一般の親はもちろんとして、子育て問題の専門家や教育関係者たちも同様に、というより、むしろ、それ以上に、「教育最優先型」の発想しかしようとしない傾向が圧倒的に強いんですよ。なにしろ、「いま」という時代は「教育中心」の時代ですからね、よっぽど気をつけないと、あっという間に、「教育最優先型」の発想に陥ってしまうんですよ。

というわけで、いったいどうすれば子どもに愛は伝えられるのか、どう

すれば豊かな親子関係を作っているのか、子どもとの関係そのものを豊かに作っていくためにはどうすることが必要なのか、といった問題について考えるためには、その前に、「教育最優先型」の発想ではなぜいけないのか、「教育最優先型」の発想に立つ子育て論ではどうしていけないのか、といった問題についていったんはきちんと考えておく必要があると私は思うんです。

そこで、そういった発想に立つ子育て論の典型的な例として<資料④>を挙げてみたわけなんです。この資料は、心理学者や社会学者や教育学者など、日本の代表的な子育て問題の専門家を動員して文部省（現在は文部科学省）が1999年に作成し、それ以来、幼稚園や学校や保育関連施設など、子どもに関わる諸機関や諸組織を通して全国の保護者たちに大量配布してきた子育て問題に関する啓発パンフレット、『家庭教育手帳』の一節な

<資料④>

**子どもを不幸にしたいなら、
何でも買ってあげればいい。**



安易にモノを買い与え過ぎると、子どもは欲しいモノを手に入れるために努力したり、我慢したり、工夫したりすることができなくなります。そして、やたらとモノを欲しがり、自分の気持ちを抑えられなくなってしまいます。

ねだられても必要以上のモノを買い与えないこと。こづかいは多すぎず決まった額の中で自分でやりくりさせること。

子どものための思うなら、お金より、心や愛情を使いましょう。

子どもに我慢を覚えさせる、と決めよう。

文部省『家庭教育手帳』19頁。

春日：子どもに愛は伝わっていますか

んですよね。一読すればすぐわかりますように、この資料には「教育最優先型」の発想に立つ子育て論が非常に明確な形で語られているんですよね。というわけで、この資料で語られている子育て論をひとつの典型的な例として取り上げてみて、「教育最優先型」の発想ではなぜいけないのか、「教育最優先型」の発想に立つ子育て論ではどうしていけないのか、といった問題について少々考えてみたいと思うんです。

そこで、<資料④>をご覧くださいなのですが、この資料には、まず冒頭に、「子どもを不幸にしたいなら何でも買ってあげればいい」という、いささか脅迫めいた表題がありまして、その表題に引き続き、こう書かれているんです。「安易にモノを買い与え過ぎると、子どもは欲しいモノを手に入れるために努力したり、我慢したり、工夫したりすることができなくなります。そして、やたらとモノを欲しがり、自分の気持ちを抑えられなくなってしまいます。ねだられても必要以上のモノを買い与えないこと。こづかいは多すぎず、決まった額の中で自分でやりくりさせること。子どものことを思うなら、お金より、心や愛情を使いましょう」と、こう書かれておりまして、最後に、「子どもに我慢を覚えさせると決めよう」と、スローガンふうに書かれているんです。

どういうことかと言いますと、こういうことなんです。——子どもに我慢をさせないで、安易にモノを買い与え過ぎると、何でも欲しがるようになっちゃいますよ。我慢できない子になっちゃいますよ。「欲しい！」「欲しい！」という気持ちが抑えられない、欲しがり屋さんになっちゃいますよ。それでもいいんですか、お母さん。もしそれがいやだというんだったら、必要以上のものは買ってやらないことですね。我慢させることですね。子どものためを思うんだったら、我慢することを覚えさせなきゃいけないんです、と、こういうふうに言いたいんです。これが、要するに、文部省が作成して全国の保護者たちに大量配布してきた啓発パンフレット、『家庭教育手帳』で語られている子育て論のエッセンスなんです。

さて、皆さん。皆さんは、この子育て論をご覧になって、どう思われた

でしょうか。「なるほど、そうだ!」とか「まったくその通りだ!」と思われた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。私が勤務している大学の学生さんたちにこの資料を見せて感想を聞いてみましても、ほとんどの学生さんたちが「非常に共感できる」とか「まったくその通りだと思う」といった内容の感想を述べてくれるんですよ。皆さんご自身としてはいかがでしょうか。「まったくその通りだ!」と思われた方も少なからずいらっしゃるのではないのでしょうか。しかしながら、私自身としましては、この子育て論は根本的に間違っていると思うんですよ。発想の出発点において間違っている。そう私は思うんですよ。もちろん、「一見、もっともらしいこと」が語られています。部分部分を取り出してみれば「決して間違いいではない」と言うべきことも語られています。しかしながら、全体としてみれば、やはり根本的に間違っている。発想の出発点において間違っている。そう私は思うんですよ。

それでは、いったい何が間違っているのか、どういう点で間違っているのか、という点についてなんですが、決定的な問題は、この子育て論が、子どもとはもともと「欲しがり屋」なんだという考え方、あるいは、本質的に「欲しがり屋」なんだという考え方を前提として語られている点にあると私は思うんです。そういった前提に立ってこの子育て論は「我慢できる子ども」と「欲しがり屋の子ども」の区別をするわけなんですが、この二つのタイプの子どもは、しかしながら、決定的な点においては大差ない、というより、むしろ、本質的には同じ部類の、そういった子どもなんですよ。もちろん、表面的に見るかぎり、「正反対の」子どものようにも見えるんですよ。しかしながら、にもかかわらず、決定的な点においては大差ない、本質的には同じ部類の、そういった子どもなんですよ。どういふことかと言いますと、こういうことなんですよ。

まず、「欲しがり屋の子ども」というのはどんな子か。『家庭教育手帳』の子育て論によれば、もともと「欲しがり屋」だった子どもが、「我慢すること」を教えられなかったために、「欲しがり屋の子ども」のまんまで育ち

春日：子どもに愛は伝わっていますか

上がってしまった子ども、なんですよ。としますと、当然、このタイプの子どもは、もともとから「欲しがり屋」だったわけですね。そして、いまもなお「欲しがり屋」のまんまだというわけですね。それに対して、「我慢できる子」は、もともとは「欲しがり屋」だった子どもが、「我慢すること」を教えられて、「欲しい！」「欲しい！」という気持ちを自分で抑えられるようになった子ども、なんですよ。ということはどういうことかと言いますと、「我慢できる子」というのも、もともとは「欲しがり屋」だったというわけですね。この点に関するかぎり、「我慢できる子」も、「欲しがり屋の子ども」と何ら違いはないんですね。

それでは、「いま」という時点においてはどうか。「いま」という時点においては、「我慢できる子」は、「欲しい！」「欲しい！」という気持ちを自分で抑えられるようになっていっているんですね。そういった点では、「欲しがり屋の子ども」とは、「正反対の」子どものようにも見えるんですね。しかしながら、だからと言って、「欲しい！」「欲しい！」という気持ちそれ自体がなくなったわけではないんですね。「欲しい！」「欲しい！」という気持ちそれ自体はいまも心のなかにあるんですね。ただ、その気持ちを自分で抑えられるようになっていっただけであって、「欲しい！」「欲しい！」という気持ちそれ自体はいまも消えることなくあるんですね。そういった意味では、「我慢できる子」も、内的には「欲しがり屋」のまんまだというわけなんですよ。そういった点でも、「我慢できる子」は、「欲しがり屋の子ども」と何ら違いはないんですね。

というわけで、「欲しがり屋の子ども」も、「我慢できる子」も、いずれももともとは欲しがり屋だったという点において、そして、いまもなお（少なくとも内的には）欲しがり屋のまんまだという点において、何ら違いはないんですね。唯一違う点はどこにあるかという点、「欲しい！」「欲しい！」という気持ちを一方は抑えることができないままであるのに対して、もう一方はその気持ちを自分で抑えられるようになっていっただけで、それ以外の点では、この二つのタイプの子どもは、何ら違いは

ないんですね。

ということはどういうことかと言いますと、『家庭教育手帳』の子育て論は、要するに、「我慢できる子」であれ、「欲しがり屋の子ども」であれ、子どもとはもともと欲しがり屋なんだという考え方、そして、いままなお(少なくとも内的には)欲しがり屋のまんまなんだという考え方、当然、子どもとは本質的に欲しがり屋なんだという考え方、裏返せば、欲しがり屋でない子どもなんてありえないんだという考え方、そういった考え方を前提として語られているというわけなんです。『家庭教育手帳』の子育て論を少々厳密に検討していけば、そういう結論になってしまうんですね。

しかしながら、そういった考え方は、それ自体が、完全に間違っていると私は思うんです。なぜかという、その理由は、以下の点にあると私は思うんです。すなわち、子どもというのはもともとから欲しがり屋だったわけでは決してなく、本質的に欲しがり屋だというわけでも決してなく、関係のなかで「欲しがり屋さん」に造られていく。決して満ち足りることを許されない、「欲しい!」「欲しい!」と言い続けなければ決して与えられることのないような、というより、むしろ、「欲しい!」「欲しい!」と言い続けていって、力づくで奪い取っていくしかないような、そういった関係のなかで造られていく。まさしくそういった意味で、『家庭教育手帳』の子育て論は、完全に間違っていると私は思うんです。

実際、欲しがってばかりの子どもではない、心の底から満ち足りることができ、そういった意味では『家庭教育手帳』で言われている「我慢できる子」でもなければ「欲しがり屋の子ども」でもない、そういった子どもも間違いなく存在すると私は思うんです。「満ち足りることができ子ども」(略して「満ち足りる子ども」と私は呼んでいるわけなんです)が、そういった子どもも間違いなく存在するということがそれ自体が『家庭教育手帳』の子育て論が完全に間違っているということを明白に証拠立ててくれていると私は思うんです。

それでは、「満ち足りる子」というのはどんな子か。具体的にイメージし

春日：子どもに愛は伝わっていますか

ていただくために、例を挙げて説明してみようと思うんですが、仮に、高校生ぐらいの女の子がいたとしますよね。その子の場合、学校指定の通学用コートはあるんだけど、プライベートに着用するコートは持っていないとしますね。だけど、その子のお父さんが非常に優しいお父さんで、「子ども大好き」タイプのお父さん。というわけで、冬の寒さも厳しくなったころ、「お前もコートが欲しいんじゃないか」ってことになったとしますよね。「冬物一掃大バーゲンセールも始まっていることだし、一着持っていれば何かと便利だし、ひとつ思い切って買ってやることにしようか」ってことになって、一緒に買い物に行くことになったとしますよね。で、その途中、お父さんがおっしゃるんです。「コートなんてものは毎年毎年買い換えるものではないんだから、4年でも5年でも大事に大事に使うものなんだから、本当に気に入ったものを買うんだよ」って。そう言われて、女の子は、あれこれコートを見てまわるんですが、一番気に入ったコートは少々値段が高すぎるような気がしますし、二番目に気に入ったコートでもいいかなとは思うんだけど、やっぱり一番目のコートに気は惹かれますし、といった具合で、迷いに迷った挙げ句、二番目に気に入ったコートを持ってきて、「これにしようかな」って言うんですね。

で、その様子を見ていて、お父さんは、パツと感じてしまうんです。で、娘さんにおっしゃるんです。「ほんとにそれでいいのかね」って。「もっと気に入ったコートがあるんじゃないか」って。「遠慮しないで、本当に気に入ったものを買うんだよ」って。そう言われて、女の子は、ためらいがちに、「それじゃあ、これにしようかな」って言いながら、一番気に入ったコートを持ってきて、「でも、ちょっと高すぎるよね」って言うんですね。それに対して、お父さんは、「確かに結構なお値段だね」って言いながらも、「でも、コートなんて、毎年毎年買い換えるものではないんだから、本当に気に入ったものを買って大事に大事に使っていけば、結局はそのほうが安くつくんだよ」って言いながら、「えい、やっ！」とばかりに思い切ってそのコートを買ってやったとしますよね。そうしますと、当然、娘さんは

大喜び。「高いコートを買わせて申し訳ない」と内心ひそかに思いながらも、思わず笑ってしまいたくなくなるくらいに嬉しいんですね。

で、次の年になって、またまたお父さんがおっしゃったとしますよね。「もう一着コートを買ってあげようか」って。もちろん、「仮に」の話ですよ。あくまでも「仮に」の話なんですけど、仮にそうおっしゃったとしますよね。そうしますと、おそらくその娘さんは言うんですね。「いや、去年買ってもらったコートがあるからいらない」って。何しろ、気に入って気に入って買ってもらったコートなんですからね。心の底から気に入って、大事に大事に使ってきたコートなんですからね。そのコートがまだまだ使える状態のままであるわけなんですからね。ですから、「いまはいらない」って言うはずなんですよね。もちろん、何年かして、そのコートが古くなって、型くずれしてきたとか、色あせしてきたとかいうんだったら、「うん、買って」って言うでしょうけど、去年のコートがまだまだ使える状態だったら、「いまはいらない」って言うはずなんですよね。

そういった形で、本当に欲しいときにはもちろん「欲しい！」と言うでしょうし、「うん、買って！」って言うでしょうけど、いまのところ間に合っているというんだったら「さしあたり間に合っている」と言うような子ども。そして、「またいつか買ってね」とか「本当に欲しくなったときに買ってね」と言うような子ども。つまり、本当に欲しいときには「欲しい！」とはっきり言うでしょうけど、決して無闇には欲しがらない子ども。そして、本当に欲しくなったときにだけ欲しがらる子ども。そういう子どもが、私が考える、「満ち足りる子ども」なんですよね。

それでは、「欲しがり屋さん」というのはどんな子か。

仮に、コート欲しがっている子がいたとしますよね。そうしますと、その子はれっきとした「欲しがり屋さん」なわけですから、「コートが欲しい!」「コートが欲しい!」と言い募って行って、何がなんでもコートを手に入れようとするんですね。で、そうやってコートを手に入れることができたとしますよね。そうしますと、その子はその子なりにある種の満足感

春日：子どもに愛は伝わっていますか

を覚えるんでしょうけど、その満足感はあまり長続きしないんですね。すぐ、次のものが欲しくなってしまうんですね。なにしろ「欲しがり屋さん」なわけですからね。すぐ次のものが欲しくなってしまうんですね。たとえば、セーターが欲しくなってしまうんですね。そうしますと、今度は「セーターが欲しい！」「セーターが欲しい！」と言い募って行って、何がなんでもセーターを手に入れようとするんですね。そのときには、もう、その子の頭は、「セーターが欲しい！」「セーターが欲しい！」でいっぱいになってしまっていて、せっかく手に入れたコートのことなんか、どうでもよくなってしまっているんですね。

で、そうやって今度はセーターを手に入れたとしますよね。そうしますと、その子はまたまたある種の満足感を覚えるんでしょうけど、その満足感もあまり長続きしないんですね。すぐ次のものが欲しくなってしまうんですね。たとえば、マフラーが欲しくなってしまうんですね。そうしますと、今度は「マフラーが欲しい！」「マフラーが欲しい！」と言い募って行って、何がなんでもマフラーを手に入れようとするんですね。そのときには、もう、その子の頭は、「マフラーが欲しい！」「マフラーが欲しい！」でいっぱいになってしまっていて、せっかく手に入れたセーターのことなんか、どうでもよくなってしまっているんですね。そういった形で、次から次にものが欲しくなって、次から次に手に入れたがる子ども。そして、次から次に手に入れたものが、次から次にどうでもよくなってしまふ子ども。そういった子どもが、私が考える、「欲しがり屋さん」なんですよ。

そうしますと、いったいなぜ「欲しがり屋さん」はそういった形で次から次に欲しがるのか。なぜ止めどなく欲しがってしまうのか。というより、むしろ、それ以前の問題として、いったい何を「欲しがり屋さん」は欲しがっているのか。本当に「欲しがり屋さん」が欲しがっているのは何なのか。そういった問題が次の問題として出てくると私は思うんです。

もちろん、次から次にものを欲しがっていくのが「欲しがり屋さん」なわけですから、「欲しがり屋さん」が欲しがっているのは明らかにものそ

のものであるかのように見えるんですね。しかし、単純にそう言ってしまっ
ていいのでしょうか。一見そう見えるだけで、実はそうではないのではな
いか。

たとえば、「コートが欲しい!」「コートが欲しい!」と言っている子が
いたとしますよね。その子の場合、本当にコートそのものが欲しくて「コ
ートが欲しい」と言っているのだったら、コートを買ってもらったとき、そ
の子は本当に嬉しくなって、そのコートを大事に大事にするはずと私は思
うんですね。まかり間違っても、すぐ次のものが欲しくなって、コート
のことなんかどうでもよくなってしまふ、なんてことにはならないはずと
私は思うんですね。ところが、「欲しがり屋さん」の場合はそうではな
いんですね。すぐ次のものが欲しくなってしまうんですね。そして、せ
かく買ってもらったコートのことなんか、すぐどうでもよくなってしま
うんですね。

ということはいったいどういうことか。いったい何を「欲しがり屋さん」
は欲しがっているのか。本当に「欲しがり屋さん」が欲しがっているのは
何なのか。ものそのものではないのではないのではないのか。ものそのもの
ではないサムスイング或る何か、それが本当は欲しいのではないのか。

もちろん、つい先ほども言いましたように、次から次にものを欲しがっ
ていくのが「欲しがり屋さん」なわけですから、「欲しがり屋さん」が欲
しがっているのは明らかにものそのものであるかのように見えるんですね。
しかし、そうであるかのように見えるだけで、本当はそうではないのでは
ないか。ものそのものはさしあたりの欲求対象ではあったとしても、あく
までも「さしあたりの」欲求対象に過ぎないのであって、本当はものその
ものが欲しいわけではないのではないのか。ものそのものというよりは、「手
に入れること」が欲しいのではないのか。獲得すること、奪い取ること、我
がものにすること、自分の手中に収めること、そういうことが欲しいので
はないか。だからこそ、次から次に手に入れても、手に入れたものそのも
のでは満足できず、すぐ次のものが欲しくなってしまうのではないのか。「欲

春日：子どもに愛は伝わっていますか

しがり屋」の子どもが果てしなくものを欲しがっていく理由も、「あんなに欲しがっていたのにすぐ飽きてしまう」と一般的によく言われる理由も、そこらにあると言っていいのではないか。

しかし、仮にそうだとすると、いったいなぜ、「欲しがり屋」の子どもはそれほどまでに「手に入れること」を欲しがるのか。何が欲しくて次々に「手に入れよう」としたがるのか。本当は「満ち足りること」が欲しいのではないか。心の底から満ち足りること、心の底から満ち足りていって、嬉しい気持ちや幸せな気持ち、平穏な気持ちに満たされること、そういうことが欲しいのではないか。ところが、そういうことはストレートには求めるわけにはいきませんから、そういうことを求める代わりに、子どもはものを欲しがるんですね。たとえば、クラブを欲しがるんですね。で、「クラブが欲しいよ！」「クラブが欲しいよ！」と言い募って行って、親にねだっていくんですね。ところが、それに対して、親のほうは、「えっ、またなの?!」って思ってしまうんですね。なにしろ、この間も何々を買ってやったばかりなわけですからね。ですから、言いたくなくなってしまいうんですね。「この間も何々を買ってやったばかりでしょ！」って。「何でもかんでも欲しがるんじゃないの！」って。「うちにはお金はないんじゃないかね！」って。そうしますと、当然、子どもとしては、言いたくなくなってしまいうんですね。「だって、欲しいんだもん！」って。「どうしてもそれがいるんだもん！」って。「〇〇ちゃんだって持ってるんだもん！」って。で、そうやって、結局、「そんなのはダメだ！」と言う親と「買ってくれー」「買ってくれー」と言い募っていく子どもとが力づくの綱引き合戦を繰り広げて行って、怒りや憎しみなど否定的な感情をかき立て合っていて、そうした感情をお互いにつつけ合っていくという、例の親子関係のパターンにはまり込んでいってしまうんですね。そして、その挙げ句、結局は親のほうに根負けして、子どもが欲しがるままに買い与えていくという、そういう結果になってしまうんですね。

ところが、そうやって、ようやくクラブを手に入れることができたとし

でも、子どもが手に入れるそのグラブは、すでに先ほども言いましたように、親の怒りや憎しみなど、ありとあらゆる否定的な感情がまみれにまみれてまみれ込んだ、そういうグラブなんですよ。ですから、子どもは、そのグラブを手に入れるとき、そのグラブとともに、親の怒りや憎しみなど、ありとあらゆる否定的な感情も目一杯もらってしまうことになるんですね。ですから、子どもは、そのグラブを手に入れるとき、念願のグラブを手に入れるわけですから、本当は心の底から嬉しくなって、嬉しい気持ちや幸せな気持ち、満たされた気持ちになってもいいはずなのに、そんな気持ちになるどころか、怒りや憎しみに満たされて、手当たり次第に八つ当たりでもしたくなるような、そんな気持ちにさえさせられるんですね。

で、そうやって、結局、ものを手に入れるたびに心のな中は波立って行って、心の底から満たされたいという、心の底から満たされて行って、嬉しい気持ちや幸せな気持ち、平穏な気持ちに満たされたいという、そういう欲求はまったく満たされないまま、ますますその欲求は募っていくという、そういう結果になってしまうんですね。だからこそ、心の底から満たされたいという、心の底から満たされて行って、嬉しい気持ちや幸せな気持ち、平穏な気持ちに満たされたいという、そういう欲求を満たそうとして、子どもはさらにものを求めていくんですね。そして、「何々が欲しいよ!」「何々が欲しいよ!」と言い募って行って、「えっ、またなの?!」って反応を親から引き出してしまって、「そんなのはダメ!」と言う親と「買ってくれー」「買ってくれー」と言い募っていく子どもとが力づくの綱引き合戦を繰り返して行くという、例の親子関係のパターンにはまり込んで行ってしまうんですね。で、そうやって、結局、ものそのものは手に入れたとしても、嬉しい気持ちや幸せな気持ち、平穏な気持ちに満たされたいという欲求そのものはまったく満たされないまま、ますますその欲求は募っていくという、そういうパターンになってしまうんですね。で、そういうパターンが延々と親子の間で繰り返されて行って、その繰り返しのなかで欲しがり屋さんは造られていく。これが欲しがり屋さんが造ら

春日：子どもに愛は伝わっていますか

れていく基本的な仕掛けだと言っていいのではないか。そういった意味では、子どもとは、もともとから欲しがり屋さんだったわけでは決してなく、本質的に欲しがり屋さんだというわけでも決してなく、関係のなかで欲しがり屋さんに造られていく。決して満ち足りることを許されない、「欲しい！」「欲しい！」と言い続けなければ決して与えられることのないような、というより、むしろ、「欲しい！」「欲しい！」と言い続けていって、力づくの綱引き合戦を繰り返していって、力で奪い取っていくしかないような、そういった関係のなかで造られていく。

としますと、いったい私たちはどういうふうと考えていけばよいのでしょうか。どんな子を育てていけばよいのでしょうか。「欲しがり屋の子ども」ではなく「我慢できる子」を！『家庭教育手帳』の子育て論はそう主張していたわけなんですよ。しかし、それは違うと私は思うんです。まったく違うと私は思うんです。そういう考え方こそが親子関係をダメにしてしまうと私は思うんです。としますと、いったい私たちはどう考えるべきなのでしょう。どんな子を育てていけばよいのでしょうか。「我慢できる子」ではなく「満ち足りる子」を！ そう考えるべきだと私は思うんです。

それでは、いったいどうすれば「満ち足りる子」は育てられるのか。

「惜しまぬ心」で与えること。「よし、与えよう！」という気持ちで与えること。たまには「与えたい！」という気持ちで与えること。「子どもを喜ばせたい！」という気持ちで与えること。そういうことが何より大事！ そう私は思うんです。

もちろん、「ダメ！」なら「ダメ！」でいいと私は思うんです。「子どもが欲しがるんだったら与えるべきだ」とか「子どもが欲しがるものは与えたほうがいい」なんて、言いたいわけではないんです。与えたいと思うんだったら与えればいいし、与えたくないのだったら与えなければいい。絶対与えたくないと思うのだったら「絶対ダメ！」と言えればいいし、「何がなんでもダメ！」と言えればいい。しかし、「ダメ！」「ダメ！」「ダメ！」とばかり言わないで、たまには子どもの気持ちにも耳を傾けてやって欲し

い。そして、「うん、与えてもいいかな」と思うんだったら、与えてやって欲しい。もちろん、与えるのだったら惜しみなく。というより、むしろ、より正確に言えば、「惜しまぬ心」で与えること。絶対に「いやいやながら」与えないこと。「しぶしぶ」与えるようなことはしないこと。「しょうがない子ね！」って調子でやらないこと。力ずくの綱引き合戦に子どもを引きずり込んでいって、奪うしかない関係に子どもを追い込んでいってしまわないこと。とにかく、与えるのだったら気持ちよく！「子どもを喜ばせたい！」という気持ちで与えること。幸せで満ち足りた気持ちにさせてやりたいという気持ちで与えること。そういうことが何より大事！ そう私は思うんです。

それでは、そうするためには、具体的には、どうすればよいか。たとえば、こういうやり方はどうでしょうか。

あるお父さんの話なのですが、そのお父さんには高校生になったばかりの娘さんがいらっしやいまして、その娘さんは、どういうわけか、学校が大好きという娘さん。朝 6 時ちょっと過ぎの電車に乗って登校するために、まだ暗いうちから家を出ていくという、そういう状況だったというんですね。で、駅まで歩いておおよそ 30 分。ですから、歩いていくのはちょっと大変。というわけで、「自転車を買ってくれないか」ってことになったわけですね。で、新しい自転車を買ってやったってわけ。新しい自転車と言っても、いわゆる「ママチャリ」で、1 万 5 千円くらいだったというんですが、とにかく娘さんは大喜び。駅の駐輪場を契約して、6 か月分で 5 千 5 百円の駐輪代も払いまして、自転車にはしっかりチェーンのロックをかけまして、という形で駅までの自転車通学を始めたわけなのですが、それから 1 か月もしないうちにその自転車を盗まれてしまいましたね、娘さんは大変困っているという状況。で、自転車なしでは非常に不便。かといって、買ってもらったばかりの自転車を 1 か月もしないうちに盗まれてしまったわけですから、「また買ってくれ」とは言いにくい。というわけで、「買ってくれ」ってことがなかなか言えなくて、しばらくもじもじしていたらし

春日：子どもに愛は伝わっていますか

いんですね。だけど、何日かして、「お父さん……」って、言ってきたというんですね。「いま手元にお小遣いを少しずつ貯めてきた貯金が1万円ぐらいあるから、それで自転車を買おうと思うんだけど、足りない分を出してくれないか」って。で、お父さんとしては、自転車は絶対必要なものだし、チェーンをかけてしっかりロックしていたにもかかわらず盗まれてしまったわけだから、娘に非があるわけではまったくない。娘は一方的な被害者であって、責められるべきいわれは娘にはない。にもかかわらず、その娘にお金を出させるというのは、少々かわいそう。せっかく貯めてきた1万円だろうに。というわけで、「いや、お前が悪いんじゃない。泥棒のほうが全面的に悪いんだから、自転車代は全額お父さんが出してやるよ」とよっぽど言おうと思ったんだけど、「でも、待てよ」と、そこでふと思ったというんですね。「娘は自分で1万円出すと言っているんだから、ここはいったん出させておこうか」って。「そうすると、娘はきっとがっかりするだろう」って。「せっかく貯めてきた1万円が無駄に消えてしまうわけだから、新しい自転車がきたからといって、ちっとも嬉しくはないだろう。それどころか、『あーあ』って感じになるだろう。だけど、いったんはがっかりしてもらおうか」って。で、「その後で、何日かして、1万円をバックしてやったらどうだろうか」って。「お前が悪いんじゃない。泥棒が一方的に悪いんだから、お父さんが全額出してやるよ」って。「ほら、お前が出した1万円。お前に返すから、とっときな」って。「そのほうが娘はうんと喜ぶんじゃないか」って。「最初から全額出してやっても娘は喜ぶだろうけど、それだと一通りの嬉しさで終わっちゃうんじゃないか。さしあたり1万円は出させておいて、後でバックしてやったほうが、娘はうんと喜ぶんじゃないか」って。そこで、奥さんにも相談して、「どっちのほうが娘は喜ぶと思う？」と聞いてみたところ、「そりゃあ、後でバックしてやったほうが喜ぶと思うよ」と奥さんもおっしゃいますから、「それじゃあ、そうしてみようか」ってことになって、そうしてみたというんですね。そうしましたところ、娘さんは、本当に喜んだというんですね。せっかく貯めてきた1万

円だったのに、それが無駄に消えてしまって、「あーあ」って思っていたところに、1万円が返ってきたわけですから、本当に嬉しかったんでしょうね。もちろん、最初は「いや、いらぬ」とか「自分が盗られたんだから自分で1万円は出す」と言ってすぐには受け取らなかつたらしいんですが、「いや、いいからとっとけよ」って、「お前にやるからとっとけよ」って、二度、三度言われて、「それじゃあ」って感じで受け取って、本当に嬉しそうだったというんですね。

皆さん、わかりますよね。そのとき娘さんがどんなに嬉しかったか、わかりますよね。それでは、なぜ娘さんがそのときそんなに嬉しく思ったのか、その理由についてはどうでしょうか。

それは、もう、言うまでもなく明らかだと、そう言ってしまう気持ちになりますよね。なにしろ、無駄に消えてしまったと思っていた1万円が返ってきたわけですからね。嬉しくなつて当然ですよ。しかし、それだけではないと私は思うんです。それに加えて、さらにもうひとつ、決定的な理由があったと私は思うんです。それは何かと言いますと、その1万円を返してくれたお父さんの気持ちの嬉しさ、ですね。その嬉しさがあったからこそ、娘さんは、1万円が返ってきたことを、二倍にも三倍にも喜ぶことができたわけですね。そのときの娘さんのその気持ち、わかりますよね。もしわかりにくいようでしたら、逆のケースを考えてみれば、容易にわかると私は思うんです。

たとえば、娘さんが言ったとしますよね。「悪いのは全面的に泥棒であつて、自分に責められるべきいわれはまったくない。だから、私が出した1万円は返して欲しい」って。それに対して、お父さんはお父さんで、おっしゃつたとしますよね。「いや、盗られてしまったのはお前なんだから、お前にできることはお前が自分ですべきだ。足りない分は出してやるけど」って。「だから、1万円は返してやらない」って。で、そうやって「返して欲しい!」「返して欲しい!」と言ひ募つていく娘さんと「1万円はお前が出すべきだ!」「だから1万円は返してやらない!」と言ひ張つていく

春日：子どもに愛は伝わっていますか

お父さんとが力ずくの綱引き合戦を繰り広げていって、「奪い-奪われる」関係を作っていて、その結果、娘さんが1万円を奪い返すことができたとしても、果たして娘さんは嬉しい気持ちになれたらどうか。そう考えてみればすぐわかりますよね。ただ単に1万円が返ってきたからという理由で娘さんはあんなに喜んだわけではなかったんだって。1万円を返してくれたお父さんの気持ちの嬉しさというものがあったからこそ、1万円が返ってきたことを娘さんはあんなに喜ぶことができたんだって。

ということはどういうことかと言いますと、要するに、「喜びの二重化」が起こっていたわけなんですね。無駄に消えてしまったと思っていた1万円が返ってきた嬉しさと、その1万円を返してくれたお父さんの気持ちの嬉しさと。この二つが重なって娘さんの喜びを二倍にも三倍にもしてくれた。そういった意味での「喜びの二重化」。

で、そういった意味での「二重化された」喜びのうち、第一番目の喜び、つまり、無駄に消えてしまったと思っていた1万円が返ってきた喜びというのは、少々一般化した言い方で言うとしみますと、「物に関する欲求が満たされた喜び」と言っていていいでしょうね。したがって、もう少し簡略化した言い方で言うとしみますと、「^{もの}物的欲求充足の喜び」と言っていていいと私は思うんです。次に、第二番目の喜び、つまり、その1万円を返してくれたお父さんの気持ちの嬉しさというのは、言うならば、「他者の愛や親切や優しさを感じることもできた嬉しさ」と言っていていいでしょうね。あるいは、もう少し一般化した言い方で言うとしみますと、「いい関係を他者と結び結ぶことができた嬉しさ」と言ってもいいでしょうね。そうしますと、この第二番目の嬉しさは、「いい関係を他者と結び結びたい」という欲求が充足された喜びという意味で、「関係的欲求充足の喜び」と言っていていいと私は思うんです。そうしますと、「^{もの}物的欲求充足の喜び」と「関係的欲求充足の喜び」とが相乗的に作用しあって喜びを二倍にも三倍にもしてくれる。そういった意味での「喜びの二重化」。それこそがそのときその娘さんを心の底から嬉しくさせた理由だったんだと、そう言っていていいと私は思うんです。

そうしますと、子どもを心から嬉しくさせるためにはどうすればよいか、「満ち足りることができる子」に育てるためにはどうすればよいか、その方法が自ずと明らかになると私は思うんです。その方法、その秘訣、それは、子どもにものを与えるとき、「物的欲求充足」が同時に「関係的欲求充足」でもあるような形で与えること。そう私は思うんです。

それでは、そうするためにはどうすればよいか。先ほどから何度も何度も言ってきましたように、与えるのだったら気持ちよく、ゴチャゴチャ言わずに与えること。「よし、与えよう！」という気持ちで与えること。できれば「与えたい！」という気持ちで与えること。「子どもを喜ばせてやりたい！」という気持ちで与えること。そうしたときはじめて喜びは二重化される。そう私は思うんです。

もちろん、考え方や感じ方は人さまざまでありまして、あるとき、私が勤務している大学の学生さんたちにこのお父さんの話をしたんです。そうしましたところ、学生さんのひとりが、「なんという姑息な父親だ！」と言ったんです。「そうかなあ」「そういう感じ方もあるのかなあ」と私は思ったんですが、それと同時に、「姑息でも何でもいいじゃないか！」とも私は思ったんです。「子どもに意地悪するためにやっているのではなく、子どもを喜ばせるためにやっているんだから、姑息でも何でもいいじゃないか！」と。というより、むしろ、「姑息でも何でも構わない、たまには『子どもを喜ばせてやりたい』ぐらいのことは考えて欲しい！」と私は思ったんです。もちろん、いまでも私はそう思っているわけなんです、皆さんとしてはいかがでしょう。

*

それでは、次に、もうひとつだけ、「子どもを心から喜ばせるための方法」として、より日常的な場面での例を挙げてみたいと思います。お小遣いのやり方に関する例なんです、私は、子どもが一定の年齢に達したら、決

春日：子どもに愛は伝わっていますか

まった額のお小遣いをやるようにしたほうがいいと思うんです。幼稚園の「年長さん」か小学校に入学する前後がその年齢かなと思うんですが、それくらいの年齢になりますと、自分で買い物することにだんだん興味を持つようになってきますし、お金が価値あるものだということも少しずつわかるようになってきますから、そろそろ決まった額のお小遣いをやるようにしたほうがいいと思うんです。

もちろん、ものの考え方や感じ方は本当に人さまざまでありまして、「うちでは必要なものは親が買ってやるようにしていますから、特にお小遣いをやる必要は認めません」とおっしゃる方も当然いらっしゃるわけですね。それはそれでももちろんひとつの考え方ですし、ひとつの子育て方針なわけですから、それはそれでももちろん構わないとは思いますが、しかし、私自身としましては、子どもがひとりで買い物できる年齢に達したら、決まった額のお小遣いをやるようにしたほうがいいと思うんです。そのほうが子どもも喜ぶと思うんです。

そうしますと、当然、その次の問題として、金額はどれくらいがいいかということになってくるわけなんです、これもまた人さまざまでありまして、いろんな考え方があってももちろん構わないとは思いますが、しかし、たとえば小学校低学年の子どもだったとして、ひと月に5千円とか1万円、なんてことはありませんよね。というより、あってはいけませんよね。まあ、4百円か5百円、あるいは、せいぜい6百円ぐらいがいいところかなと私は思うんですが、いずれにせよ、子どもが一定の年齢に達したら、決まった額のお小遣いをやるようにしたほうがいいと私は思うんです。そのほうが子どもも喜ぶと私は思うんです。

しかし、もっともっと子どもを喜ばせたいと思うんだったら、ときどき「おまけ」をあげるんですね。「今月は予定外の収入があったから」って。「特別、おまけをあげようか」って。あるいは、「今日は何だかいい気分だから」って。「特別、おまけをあげようか」って。そうしますと、子どもは喜ぶますよー。ほんとに喜ぶますよー。「ええっ、ほんとお?!」って。

「やったあ！」って。

で、右手にたとえば百円玉 3 個と 50 円玉 1 個を握って、左手には 50 円玉 1 個と 10 円玉 8 個を握って、両方の手を子どもの前に突き出して、カチャカチャカチャと揺すって音を出して、「どっちにする？」ってやるんですね。そうしますと、子どもは一生懸命耳を澄まして、「どっちが多いかなあ？」「どっちが得かなあ？」って感じでしばらく考えて、「こっち！」って感じで、にぎやかな音のする、左手のほうを選ぶんですね。ですから、「ええっ、本当？」「本当にこっちでいいの？」って感じで少々わざとらしく言いながら、左手を開いてやって、「はい、130 円！」って感じで 130 円を見せてやって、「馬鹿だねえ。こっちにすれば 350 円だったのに！」って感じで右手の 350 円を見せてやると、「えーっ、ほんとー?!」「悔しいー！」って感じで子どもは悔しがりますから、そうやってしばらく悔しがらせた後で、「えーい、今日は特別大サービスだあ！」って感じで 350 円を 130 円に追加してやって、「ほら、ゼーんぶ、お前にやる！」って感じで子どもにやれば、子どもは喜びますよー。もう、びっくりするぐらい喜びますよー。「ええっ、ほんとにお?!」って。「嬉しいー！」って。

で、そうこうしてるうちに子どももだんだん賢くなって、簡単にはだまされなくなってしまうんですね。で、「どっちにする？」ってやると、「こっち！」って感じで、350 円のほうをパッと当てたりするんですね。ですから、「おー、大当たりー！」「350 円！」って感じで 350 円を見せてやって、「よかったねえ、こっちを選んで！」「こっちは 130 円だったんだよ！」って感じでもう一方の 130 円を見せてやると、「わーい！」「やったあ！」「大成功！」って感じで子どもは喜びますから、そうやってしばらく喜ばせた後で、「えーい、今日は特別大サービスだあ！」って感じで 130 円を 350 円に追加してやって、「こっちのほうもお前にやる！」って感じで子どもにやれば、子どもはまたまた喜びますよー。ほんとに喜びますよー。「わーい！」「やったあ！」「嬉しいー！」って。「お父さん、大好き！」「有難う！」って。

春日：子どもに愛は伝わっていますか

で、これくらい子どもを喜ばせてやって、かかった費用は、いくらだったと思います？ 月々の決まった額のお小遣いを別にすれば、わずか480円ですよ。わずか480円の追加でこんなに喜んでもらえるんだったら、安いものだとは思いませんか。このやりとりの間に、子どもは何回喜んだと思います？ 4回ですよ。まず最初に、月々のお小遣いをもらって喜んで、「今月は特別おまけをあげようか」って言われて喜んで、350円を見事に当てて喜んで、130円追加してもらって喜んで、以上合計4回ですよ。月々のお小遣いをもらって喜んだのを別にすれば、3回も余分に喜んだんですよ。ほんとに、わずか480円の追加で3回も余分に喜んでもらって、心から満ち足りた気持ちになってもらって、「お父さん、大好き！」「有難う！」って顔まで見せてもらって、そうしますと、当然、親としても嬉しくなって、子どものことが可愛くなって、親子ともどもに嬉しくなって、愛と信頼に満ち満ちた関係が築けていけて、平和で暖かい家庭が作っていけて、そのためにかかった費用がわずか480円だったとしたら、安いものだとは思いませんか。「なるほど、うまいやり方だ」とか、「おもしろいやり方だ」とは、思いませんか。「うちでもやってみようかな」と思われた方はいらっしゃるいませんか。もしいらっしゃるとしたら、是非一度、試しにやってみて下さいな。きっと子どもは喜びますよ。「お母さん、大好き！」「有難う！」って言ってくれるかも知れませんよ。

ただし、このやり方にはひとつだけ欠点があるんですね。どういう欠点かと言いますと、このやり方はしょっちゅうやってはいけないということです。「特別なおまけ」だからこそ嬉しいんであって、しょっちゅうやっていたら特別でも何でもなくなってしまいますからね。ですから、このやり方はしょっちゅうやってはいけないんです。まあ、やるとしても、年に3回か4回ぐらいがいいところでしょうね。ほんとに、私なんか「子ども大好き」人間ですから、「今日は特別だよ！」って毎日やって、毎日でも子どもを喜ばせてやりたいぐらいなんですけど、そういうわけにはいかないんですね。本当に子どもを喜ばせたいと思うんだったら、「毎日でもやり

たい気持ち」は我慢して、「ここ一番！」というときにだけやるようにしなければいけないんですね。でないと、それが当たり前になってしまますからね。そして、その結果、「特別なおまけをもらって特別な喜びに満たされる」という貴重な経験をするチャンスを子どもから奪ってしまうことになりますからね。それどころか、「特別なおまけをもらって心から喜べる」という感覚まで子どもから奪ってしまうことにもなりかねませんからね。ですから、このやり方はしょっちゅうやってはいけません。これがこのやり方の唯一の欠点であり、問題点であり、留意すべき点だと私は思うんです。

それから、さらにもうひとつ。先ほどから何度も何度も言ってきましたように、ものの考え方や感じ方は本当に人さまごまでありまして、私がいま話してきましたようなやり方がどうも好きになれないとおっしゃる方も当然いらっしゃるわけですね。「ゲームか賭け事みたいな感覚でお金のやりとりをするなんて、はしたない」と思われる方も当然いらっしゃるわけですね。しかし、そういう方が仮にいらっしゃったとしても、それはそれで構わないと私は思うんです。そういう方に対してまで、「いや、そうじゃないんだ！」とか「このやり方が絶対いいんだ！」なんて、言いたいわけではないんです。そういう方はそういう方で、その方なりのやり方を工夫していかなければいいと私は思うんです。ただ、そういう方も含めて、是非ご理解いただきたいのは、子どもにものを与えるとき、「しょうがない子ね！」って調子で与えるのは絶対にいけないということ。子どもにものを与える度毎に怒りや憎しみなど否定的な感情^{ネガティブ}を伝えていくというやり方がもっともよくないやり方だということ。だから、そういうやり方は絶対やってはいけないんだということ。裏返せば、与えるのだったら気持ちよく、ゴチャゴチャ言わずに与えること。「よし、与えよう！」という気持ちで与えること。子どもが嬉しくなるような形で与えること。幸せで満ち足りた気持ちになるような形で与えること。先ほどからの言い方で言うとしますと、「物的欲求充足^{もの}」が同時に「関係的欲求充足」でもあるような形で与え

春日：子どもに愛は伝わっていますか

ること。要するに、「二重化された喜び」に子どもが満たされるようなやり方で与えること。そういうことが何より大事なんだよということ。豊かな親子関係を作っていくためにも、「満ち足りる子ども」を育てていくためにも、そういうことが何より大事なんだよということ。そのことだけは是非ご理解いただきたいと、先ほどから私が話してきましたようなやり方がどうも好きになれないとおっしゃる方も含めまして、そのことだけは是非ご理解いただきたいと、そう私は思うんです。そして、そのうえで、その人その人がその人なりのやり方を工夫していかれればいいと私は思うんです。

それから、さらにもうひとつ。こういうふうに話して参りますと、必ずと言っていいくらい出されてくる質問があるんですね。いろんな質問があるんですが、そのなかに、「そんな調子でやっていたら、ますます欲しがるようになってしまうんじゃないですか」という質問があるんですね。「子どもが一定の年齢に達したら決まった額のお小遣をやるようにしたほうがいいと思いますよ」ってことを私が言いまして、「でも、もっともっと子どもを喜ばせたいと思うんだったら、ときどきおまけをやるんですね」って私が言いますと、「でもお……」って感じで、疑問を出してこられるんですね。「そんな調子でやっていたら、ますます欲しがるようになってしまうんじゃないですか」って。「今月もまたおまけが欲しいよって毎回言うようになって、毎月毎月おまけを欲しがるようになって、ますます歯止めがきかなくなってしまうんじゃないですか」って。

しかし、そういう心配はないと私は思うんです。余程のことでもないかぎり、そうはならないと私は思うんです。仮に子どもが「今月もまたおまけが欲しいよ」って言ったとしても、「またいつかね」って言いさえすれば、子どもはすぐに納得して、退き下がってくれるはずと私は思うんです。子どもって、そういうものだと私は思うんです。というより、大人子どもの区別なく、およそ「人間」なるものが、そういうものだと私は思うんです。格別楽しみに待ち望む「特別な日」というものがあるからこそ、普段はいい

いつも通りの毎日をいつも通りに受け入れることができる。たとえ少々の不満はあったとしても、少々つらいことがあったとしても、いつかは必ず「特別な日」がやってくると思えるからこそ、普段はいつも通りの毎日をいつも通りに受け入れることができる。と同時に、いつも通りの毎日をいつも通りに受け入れる「普段の日々」というものがあるからこそ、やがてやってくるであろう「特別な日」を格別な思いをもって待ち望むことができる。そして、その日が実際にやってきたときは、その日を格別嬉しい「特別な日」として、心の底から喜ぶことができる。そうやってこれまで人類は生きてきた。それが人類の歴史の真実だったんだと、そうやって人類はこれまで生きてきたんだと、いささかオーバーに言ってしまうえば、そう言っていて私は思うんです。貧しかったかつての時代の人々にとって、盆や正月がそうでしたように。あるいは、厳しい労働の季節の後に訪れる「祝祭の日々」がそうでしたように。あるいは、世界各地で見られるカーニバルやフェスタがそうだとされていますように。

それとまったく同じことで、親子の間でも「特別な日」を作ればいいと私は思うんです。そうしたとき、はじめて、子どもとしては、いつかは必ず「特別な日」がまたやってくるんだと思えるようになるわけですから、そのとき、はじめて、子どもとしても、いつかやってくる「特別な日」を楽しみに、普段は「いつも通り」の毎日をそれなりに納得しつつ受け入れていくということが容易にできるようになると私は思うんです。だからこそ、仮に子どもが「今月もまたおまげが欲しいよ！」って言ったとしても、「またいつかね」って言いさえすれば、子どもはすぐに納得して、退き下がってくれるはずと私は思うんです。だからこそ、そういった意味での「特別な日」を親子の間で作ること、言うならば、親子にとっての「祝祭の日」を親子の間で作ること、そうすることが子育てをしていくうえで非常に大きな意味をもってくる。「満ち足りる子ども」を育てていくためにも、豊かな親子関係を作っていくためにも、非常に大きな意味をもってくる。そう私は思うんです。

春日：子どもに愛は伝わっていますか

これは、もちろん、言うまでもなく、「お小遣いのやりとり」だけの話ではないんですね。それ以外のいろんな点でもまったく同様に言えることなんですね。たとえば、「ねんねの時間」をどうするか、なんて問題についてもまったく同様に言えることなんですね。

もちろん、「ねんねの時間」に関しましては、必ずしも、一概に言えない面もあると思うんです。なにしろ、各家庭には各家庭で、いろんな事情があるわけですからね。たとえば、部屋数は充分あるのかどうか、専用の寝室が確保できるのかどうか、お母さんも仕事をお持ちなのかどうか、お父さんの勤務条件はどうか、一定の時間までに帰宅できるのかどうか、など。ですから、必ずしも一概には言えないと思うんですが、しかしながら、にもかかわらず、考え方としてはまったく同様に言えると言っていいのではないか。

ということはどういうことかと言いますと、こういうことなんですね。

ずいぶん以前のことなんですが、あるとき、小学校4年生と6年生の子どもをもつ40歳前後のお母さんと、3歳になったばかりの子どもをもつ30代前半の若いお母さんの三人で、何やら雑談をしていたんです。そのとき、どういう話の流れでその話題になったのか、もうすっかり忘れてしまったんですが、「親子の間には一定のルールがあったほうがいいと思いますよ」って話になったんです。で、「たとえば『9時になったらねんねだよ』って感じで、一定のルールがあったほうがいいと思いますよ」って私が言ったんです。そしたら、年配のほうのお母さんが、「えーっ、うちにはそんなルールはありませんよ！」っておっしゃるんです。まあ、その方の場合は子どもさんがもう小学校の4年生と6年生ですから、「ねんねの時間」は「自主管理」になっていて、だから「そんなルールはもううちでは必要ありませんよ！」ってわけなんでしょうけど、それに対して、若いほうのお母さんが、「うちにはあります！」っておっしゃるんです。で、『9時になったらねんねだよ』って決めてるんですよ！」って、少々自慢そうにおっしゃるんです。ですから、私は言ったんです。「でもね」って。「ルー

ルはときどき破らなきゃいけないんですよ」って。そしたら、そのお母さんがおっしゃるんです。「えーっ、ルールを破っていいんですか?!」って。「いったん決めたルールは必ず守らせるようにして下さいって、いつも保育園の先生から言われているんですよ！」って。「でないと、ルールを守れない子になってしまいますからね！」って。ですから、私は言ったんです。「いや、いや、そうじゃないんですよ」って。「ルールはときどき破らなきゃいけないんですよ」って。

皆さん、考えてもみてくださいよ。子どもだって、どうしても寝たくないときがありますよね。そんなとき、「ルールは必ず守らせるんだ！」なんて調子でやってたら、どういう結果になってしまうか、考えてもみて下さいよ。まず、子どもが言いますよね。「まだ寝たくないよー」「もうちょっと起きていたいよー」って。そしたら、親は言いますよね。「何言ってるのよ!」「もう 9 時よ!」って。「だから、もうねんねよ!」って。だって、「9 時になったらねんね」ってルールなんですからね。ですから、当然、言いますよね。「もう 9 時だからねんねよ!」って。そうしますと、子どもはたいていの場合は仕方なしに二階の寝室に上がって行って、お布団に入ることになるんでしょうけど、でも、どうしても寝たくないときがありますよね。そういうときは、子どもだって、当然、言いたくなりますよね。「でもお、まだ寝たくないよー」「もうちょっと起きていたいよー」「まだ全然眠くないんだよー」って。そうしますと、当然、親としては、ますます強く言うことになりますよね。「何言ってるのよ!」「もう 9 時よ!」「グズグズ言っていないで早く寝なさい!」って。だけど、子どもとしては、どうしても寝たくないわけなんですから、当然、言いたくなりますよね。「でもお、まだ全然眠くないんだよー」「だから、まだ起きていたいんだよー」って。でも、ルールはルールですからね。当然、親は言いますよね。「わがまま言ってるのよ!」「もう 9 時よ!」「9 時になったらねんねでしょ!」って。「わがまま言っていないで早く寝なさい!」って。

で、そうやって、結局、子どもは仕方なしに二階の寝室に上がっていく

春日：子どもに愛は伝わっていますか

わけなんです、それでも寝る気にはなれないんですね。ですから、二階の寝室には行ったものの、何やらゴソゴソやりながら、遊んでいたりするんです。で、その音に、ふとお母さんは気づくんです。そして、一瞬怒りを覚えてしまうんです。「何よ、あの子！」「まだ寝てない！」って。で、怒った勢いで二階に上がって行って、子どもを叱って言うんです。「何やってんのよ！」「もう、ダメよ！」「グズグズしてないで早く寝なさい！」って。で、力ずくで子どもを布団に入らせて、部屋の明かりを強引に消して、「もう9時過ぎたんだから早く寝なさい！」って言葉を投げつけて、居間に降りていくんです。ところが、それでも子どもは寝る気にはなれないんです。ですから、布団のなかに頭からもぐり込んで、懐中電灯なんかを持ち込んだりして、ゴソゴソ遊んでいたりするんです。その頃には、もう、階下のお母さんは、全神経を集中して、二階の音に聞き耳を立てて、子どもの様子をうかがっているんです。すると、かすかに聞こえてくるんです。何やら子どもがやっている音が。そうしますと、もう、その瞬間に、お母さんはカッと頭にきてしまって、階段をドシンドシンと踏みならしながら二階に上がって行って、子どもを怒鳴ってしまうんです。「何やってんのよ！」「この子は、もう！」「いつまでグズグズやってんのよ！」って。で、子どもの布団をパーッと引きはがして、懐中電灯を力まかせに取り上げて、「ほんとに、もう！」「いい加減にしなさい！」「もう9時過ぎたんだからさっさと寝なさい！」って怒鳴りつけてしまうんです。で、そうやって子どもはお母さんに怒鳴られて、「えーん」って感じて泣き出して、そのまま泣きながら寝入ってしまうという、そういう結果になってしまうんです。

ほんとに、「何という不幸なこと！」と私は思うんです。「ルールを守る子」を育てようとしてこんな結果になるなんて、「何という不幸なこと！」と私は思うんです。そんなんで「ルールを守る子を育てる」ことになっているのかどうか、大いに疑問だと私は思うんです。「ルールを守る子」を育てるところか、単にルールを守らせているだけじゃないか。力ずくでルールを守らせているだけじゃないか。そう私は思うんです。

もちろん、先ほどからの私の話し方が少々極端すぎたかなあとは思うんです。そのために、いささかオーバーすぎる印象を与えてしまったかなあとは思うんです。しかしながら、だからといって、「まったくありえない話」ではないと私は思うんです。というより、「大いにありえる話」だと私は思うんです。だから、私は思うんです。ルールはときどき破ればいいんだって。「破る」という言葉が不適切でしたら、少々言葉を換えまして、「ときどきルールを停止する」とか、「ルール通りの執行を一時的に中断する」と言ってもいいと私は思うんです。いずれにせよ、そういった形で例外を作る。そういうことがあってもいいし、そういうこともあったほうがいい。というより、たまにはそういうこともあるべきだ。そう私は思うんです。

としますと、いったいどういうことになってくるかということなんですが、たとえば、子どもが言ったとしますよね。「まだ寝たくないよー」「もうちょっと起きていたいよー」って。そしたら、親は言いますよね。「そんなのダメよ!」「もう 9 時よ!」って。でも、子どもとしては、どうしても寝たくないわけなんですから、当然、言いたくなりますよね。「でもお、まだ寝たくないよー」「もうちょっと起きていたいよー」って。でも、ルールはルールですからね、当然、親は言いますよね。「でも、9 時になったらねんねでしょ!」って。「だから、もうねんねよ!」って。でも、子どもとしては、どうしても寝たくないわけなんですから、それでも、言いたくなりますよね。「でもお、まだ全然眠くないんだよー」「だから、もうちょっと起きていたいんだよー」って。そうしますと、当然、親としては、「何わがまま言ってるのよ!」「もう 9 時よ!」「そんなわがまま言う子は知らないよ!」って、普通なら言いたくなくなってしまうところなんですけど、しかし、そこで「ちょっと待てよ」と考えて、「そうか。そんなに眠くないか。だったら仕方がないか。たまにはいいことにしてやろうか」って考えて、ひとりごとみたいに言うんですね。「うーん、そうか。そんなに眠くないか。もう 9 時なのに、困ったねえ」って。で、子どもに言ってやるんですね。

春日：子どもに愛は伝わっていますか

「それじゃあ、わかった。仕方がない。今夜は特別いいことにしてやろうか！」って。「10時半までは起きていていいことにしてやろうか！」って。そうしますと、子どもはきっと喜びますよー。ほんとに喜ぶと思いますよー。「ええっ、ほんとお?!」って。「ほんとにいいのお?!」って。ですから、子どもに言ってやるんですね。「その代わりに、10時半になったらねんねだよ」って。「ちゃんと約束は守れるよね？」って。そうしますと、当然、子どもは言いますよね。「うん。わかった」「もちろん、守れるよ！」って。

というわけで、今夜は「特別な日」ってことになったわけですから、舞台装置をそれらしく整えることにしましょうか。まず、いつものテーブルクロスは取り外しまして、お客さん用のきれいなテーブルクロスに取り替えまして、ねんねの前のクッキーなんて本当は厳禁なんですけど、今夜は「特別な日」ってわけですから、とっておきの来客用クッキーを「2個までなら食べていいことにしようか」って感じで与えまして、もちろん、「ねんねの前には歯磨きするんだよ」ってしっかり約束させまして、……なんて調子でやってもいいし、やらなくても全然構わないわけなんですけど、とにかく今夜は「特別な日」ってわけですから、楽しい雰囲気好きなことをやっていますと、1時間半なんて時間はあっという間に過ぎてしまいますから、気がついたときにはもう10時半、なんてことになってしまうんですね。ですから、「あっ、もう10時半だあ」って感じで子どもに言って、「もう10時半だから、もうねんねよ」って子どもに言えば、「ほんとだあ。もう10時半だあ」って感じで子どもも言って、「それじゃあ、おやすみー。お母さん」って子どもは言いながら、きげんよく寢室に上がっていつくられるはず。で、そうやって親子ともどもに楽しい時間を過ごして行って、子どもは胸いっぱい嬉しい気持ちに満たされて行って、お母さんのことを心の底から好きになっていく。そして、愛と信頼に満ち満ちた関係が親子の間に作られていく。いささかオーバーではありますが、そう私は思うんです。

としますと、問題は、その次の日も「今日も『特別な日』にして欲しい

よ！」って子どもが言うかどうか、ですよ。その点はどうかという問題なんですが、おそらく言わないだろうと私は思うんです。しかし、「絶対言わない」という保証があるわけではない。もしかしたら言うかも知れないし、もしかしたら言わないかも知れない。しかし、そのいずれであって構わない。仮に子どもがそう言ったとしても、「またいつかね」って言えばそれですむという、ただそれだけのことと私は思うんです。そんな調子で言ってやれば、子どもはすぐに納得して、「うん、わかった」と言ってくれるはず。そして、いつかまたやってくる「特別な日」を楽しみに、「9時にはねんねする」という毎日をそれなりに納得しつつ受け入れてくれるはず。そう私は思うんです。

しかし、万一そうならなかった場合はどうするのか。つまり、「またいつかね」って言っても、子どもが言うことを聞かず、「今日も『特別な日』にして欲しいよ！」ってしつこく言って、なかなか退き下がろうとしなかった場合はどうするのか。そういう場合は断固として言えばいいと私は思うんです。「そんなわがまま言うもんじゃないよ!」「きのう『特別な日』にしてやったばかりじゃないか!」「そんな毎日毎日ってわけにはいかないよ!」って。

あるいは、二日続きの「特別な日」ってのもたまにはあってもいいかなと、そうも私は思うんです。だから、言ってもいいと私は思うんです。「よし、わかった。仕方がない」って。「今夜も特別大サービスだあ!」って。「きのうに引き続き、今夜も『特別な日』ってことにしてやろう!」って。そうしますと、子どもは喜ぶと思いますよー。大喜びすると思いますよー。しかし、いくら何でも、それがもう限界ですよ。三日も続けて「特別な日」になって、絶対あつてはいけませんよね。ですから、その次の日になってもまた「今日も『特別な日』に……」って子どもが言うようでしたら、断固として言うべきでしょうね。「それはダメ!」「絶対ダメ!」「何がなんでもダメ!」って。しかし、それでも子どもが言うことを聞かず、「今日も『特別な日』に……」って言うようでしたら、怒りをもって言うべきでしょ

春日：子どもに愛は伝わっていますか

うね。「何言ってるんだよ、お前！」って。「二日連続で『特別な日』にしてやったんだよ！」って。「そんなこと言うんだったらもう二度と『特別な日』なんてしてやらないよ！」って。あるいは、もっと過激に言いましょうか。「そんなわがまま言う子は嫌いだよ！」って。「そんなわがまま言う子はもう出ていけ！」って。「そんなわがまま言うようだったら親子の縁は切らせてもらうよ！」って。まあ、もちろん、そこまで言ってしまったら、「そりゃあ、ちょっと言い過ぎじゃないの！」って言われてしまうかも知れませんが、しかし、少なくともそれくらいの迫力をもって言うべきだと、それくらいの気迫と勢いをもって言うべきだと、そう私は思うんです。

しかし、そこまで言わなければならないようなことは、実際には、ほとんどないと私は思うんです。ほとんどの子どもは、たいていの場合、「またいつかね」って言いさえすれば、すぐ納得してくれるはずと私は思うんです。そして、いつかまたやってくる「特別な日」を楽しみに、「9時にはねんねする」という毎日をそれなりに納得しつつ受け入れてくれるはずと私は思うんです。で、そうやってはじめて子ども自身が自らも納得しつつルールを守ろうとする関係、つまり、いやがる子どもを力でねじ伏せて無理矢理ルールを守らせるのではなく、子ども自身が自らも納得しつつルールを守ろうとする関係、そういう関係が親子の間に生まれてくる。そう私は思うんです。まさしくそういった意味で、「特別な日」を親子の間で作ること、親子にとっての「祝祭の日」を親子の間で作ること、そうすることが子育てをしていくうえで非常に大きな意味をもってくる。豊かな親子関係を作っていくためにも、喜びや嬉しさに満ち満ちた子どもを育てていくためにも、非常に大きな意味をもってくる。そう私は思うんです。

以上、「子どもに愛は伝わっていますか」というテーマで話して参りました。まだまだお話しすべきことがいろいろあるようにも思うんですが、残り時間も少なくなって参りましたので、そろそろ終わりにしたいと思います。ただ、最後に、ひとことだけ、全体を通して言いたかったことをもう

一度繰り返しておきたいんですが、いま親にいちばん必要なこと、それは何かと言いますと、子どもに愛を伝えること。そう私は思うんです。それでは、子どもに愛を伝えるために必要なこと、それはいったい何なのか。愛が伝わる関係を作ること。そう言っ**て**いいと私は思うんです。それでは、愛が伝わる関係を作るために必要なこと、それはいったい何なのか。「よい子を育てよう」と思わずに、「よい関係を作ろう」と思うこと。そう私は思うんです。

「よい子を育てよう！」と思**い**ますと、どうしても、ついつい言いたくなくなってしま**う**んですね。「ああしなさい！」とか「こうしなさい！」とか、「ああしちやダメ！」とか「こうしなきゃダメ！」とか。そして、関係そのものを壊してしま**う**んですね。ですから、「よい子を育てよう！」なんて**思**わずに、「よい関係を作ろう」と**思**うこと。「この親が自分の親であつてくれて嬉しいな」と子どもが感じる一方で、「この子がいてくれて嬉しいな」と親も感じることができ**る**ような関係、親子が互いに親子であることをともに嬉しく思**え**るような関係、そして、親子がともに生きてあることを親子ともどもに喜**ぶ**るような関係、そういう関係を作ること。それが何より大事なんだよと、そう私は**思**うんです。そういう関係さえ作**っ**ていけば、よい子は自然に育**つ**はず。結果としてよい子が育**つ**はず。だから、「よい子を育てよう！」なんて**思**わずに、「よい関係を作ろう」と**思**うこと。「関係そのものを豊かに作**っ**ていこう」と**考**えること。そう私は**思**うんです。

それでは、そう**す**るために必要なこと、それはいったい何なのか。「関係豊富**的**の観**点**最優先型」の発想で子育て問題を**考**えること。まかり間違**っ**ても「しつけ先行型」の発想や「教育最優先型」の発想に心**を**惑**わ**されてしま**わ**ないこと。そう言**っ**ていいと私は**思**うんです。

以上、「子どもに愛は伝わっていますか」というテーマで話して参りました。長い話になってしまいましたが、以上をもって終わりたいと思います。